

ルイ・パストールの理念を継承して

ルイ・パストール 1822-1895

「あなたがどの国の、どんな宗教の人かは問いません。今あなたは病に苦しんでおられる、それだけ聞けば十分です。あなたの苦しみを取り除くよう私は努力します」



岸田 綱太郎 / きした・つなたろう

1920年東京に生まれる。'43年同志社大学文学部心理学科でM.A.を取得。'50年京都府立医科大学卒業。'75年同大学微生物学教室教授、現在同大学名誉教授。専攻は、微生物学、癌学、伝染病学、インターフェロン。その間、'59年フランス政府技術留学生とギユスタフ・ルツィヒ癌研究所に留学。さらに'74年から'76年日仏医学協力事業の研究者としてパリ大学白血病研究所、パストール研究所でインターフェロンの基礎と応用に関する共同研究を行う。仏政府より、'79年シュバリエ・ドゥ・パルム・デ・アカデミック(教育功勞勲章)、'86年シュバリエ・ドゥ・オールド・ド・メリット・ナショナル(国家功勞勲章)を受章。現在財団法人ルイ・パストール医学研究センター理事長。

岸田 綱太郎

聞き手:佐多保彦 株式会社東横機 代表取締役社長

佐多: フランスのパストール研究所は、多くのノーベル賞科学者を輩出している細菌学・免疫学研究の世界的リーダーです。パストールが狂犬病の予防法を完成したことを記念して全世界から寄せられた寄付金をもって、1888年パリに設立されたそうですが、京都の財団法人ルイ・パストール医学研究センターは、このパリの研究所とどんな関係にあるのですか。

岸田: ここは、ルイ・パストールの理想をわが国でも実現しようと、1986年2月文部省の公益増強法人として認可を得て現在地に建築を開始し、'88年秋に発足しました。実は'95年に組織の変更がありまして、それ以前はパリのパストール研究所に直結した組織だったのですが、パリ以外のそういった研究所は、日本の他はみなフランスが植民地で作ってきたものです。特許もすべてパリの研究所のものになります。研究内容や予算・決算までパリのコントロールを受けるのは我々は義務を果たせないと申しましたところ、パリの前所長から、それでは「名前を使わせるわけにはいかない」と言ってきました。私たちは、日本は植民地ではないし、独立して研究を進めているし、ただパストールを尊敬して作った組織だということと主張して、大使館を巻き込んだり裁判沙汰になったりした後、'95年に完全な独立組織になりました。名前は、私たちはルイ・パストールを尊敬して、彼の精神を生かして病気の人々に貢献したいと願ってやっているわけですから、どうしても変えたくない。そこで、ルイ・パストールとルイをつければいだろうと交渉してくれたのが、HIVウイルスを発見したことで知られるDr. Luc Montagnier(リュック・モンタニエ)です。HIV発見前から、お互いインターフェロンの研究者として、また個人的にも、親しくしている人です。

佐多: 今でもフランスの研究所との交流はあるわけですね。

岸田: はい。前と同じように、共同研究も続け、いろいろな研究材料を送ってきたりもします。他にもパストールの名のついた独立施設には、ストラズブルのルイ・パストール大学があります。

佐多: パストールは、今でもフランス人がたいへん誇りに思う人物の一人だそうですね。

岸田: 十数年前のことですが、フランスで偉人の人気投票をやったら、私たちがたいへんよく知っているナポレオンやヴィクトル・ユーゴーなどを抜いて、パストールが第一位になったそうです。彼は幼少の頃からやさしい心の持ち主で、病気の苦しみに見るに忍びないというところから出発し、伝染病の原因を解明して細菌学・免疫学の基礎を確立した「人類の恩人」と讃えられています。生前パストールが望んだような平和で平等な医療を実践するために、私たちはこの医学研究センターを作ったのです。

佐多: 具体的にはどのような活動をされていますか。

岸田: 基礎研究活動として、インターフェロン(interferon; IFN)を中心に癌やウイルス疾患、神経科学に関する研究と研究者の育成/臨床研究・診療活動として、老人・成人病の早期発見と診療、新しい免疫療法の試み/教育・広報活動として、セミナーや講演会の実施、と大きく分けて3つの分野に取り組んでいます。

佐多: ここでは、IFNに関連してセンター独自のIFN産能測定や、新しい免疫療法を行っているそうですが、その前に、もともと先生はIFNを基礎研究から臨床応用へと導いた第一人者でいらっしゃるんですよね。

岸田: IFNは、あまり知られていないかもしれませんが、'54年に日本の長野、小島の両研究者によって発見されました。名称は、その3年後に彼らとは別個にこの物質を発見したDr. IsaacsとDr. Lindenmanという2人のイギリス人が、ウイルス干渉現象(virus interference)に関連する物質という意味で名付けたインターフェロンが使われています。

IFNは、生体内で産生され、マクロファージやNK(ナチュラルキラー)細胞に活力を与え、また一般の細胞を抗ウイルス状態に変化させる物質です。'60年代になると、抗ウイルス性の他に抗腫瘍性があることもわかって、それらを治療に応用しようという気運が高まりました。外か

ら患者に投与方法がとられたわけですが、その場合必然的に大量のIFNが必要になります。IFNには種特異性という特性があって、ヒトの細胞で生産したヒトIFNでなければ効果は望めない、今日では遺伝子操作技術で細菌や動物細胞でもヒトIFNを大量生産できますが、当時はヒト細胞を大量に確保することから始めなければなりません。私たちがわが国最初のヒト白血球IFNを生産することに成功したのは'72年です。(写真)

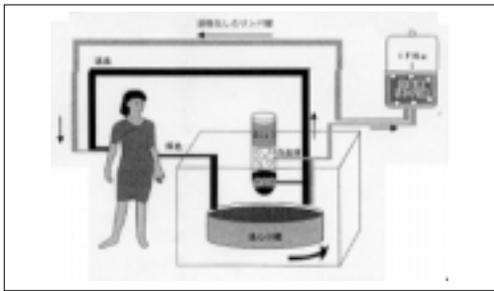
現在ではIFNは様々な疾患に応用されるようになっていますが、最近多様な生物活性をもつIFNが他のサイトカインと複雑なネットワークを形成して機能していることがわかってきたので、まだまだ臨床応用の可能性が残されていると考えています。

佐多: それでは先生のところで実際に癌の治療に応用されている、IFNANK(イフナック)療法については是非お聞かせください。

岸田: IFNANK(IFN activated natural killer)療法は、私が数年前に創案してこのセンターで開



わが国最初のヒト白血球IFN(ビン)と、白血病患者に試用した際のカルテ



IFNANK療法

発してきたもので、アメリカで特許も取得している癌の免疫療法です。白血球分離装置を使って、体外循環で、癌の患者さんの静脈血から自己の免疫担当細胞であるリンパ球を採取し、バッグ内で微量の型IFNを注入して活性化した後、直ちに患者さんに変換するという方法です。患者本人の血液が4リットル循環していて、その中の白血球を取るわけですから、50億、100億のNK細胞やリンパ球が含まれています。従来のIFN投与方法に比べて、使用されるIFNが10万単位と非常に少量のため、発熱や筋肉痛、脱毛、耐え難い全身倦怠感、網膜出血、血小板の減少、鬱状態といったこれまでのような大きな副作用がありません。

脊椎動物以外の生物は、クラゲでも昆虫でも皆、36億年くらい前に誕生しました。脊椎動物ができてからはわずか6億年です。脊椎動物には特異免疫というのがありまして、一対一に対応になっており、この型が含まないと効かないし、インフルエンザのワクチンがしばしば効かないのは、はやる型を予測してワクチンを作るので、その型がはやらなければ効かないわけです。ところが、無脊椎動物も我々ももっている非特異免疫というのは、自分だけを他のすべてから区別する免疫で、広く異物や異種細胞を排除する働きをします。いわば、一つあればどの部屋でも開けられるマスターキーのようなものです。だから先ずこれに手を出しておく。進化論的にもそうなのですが、我々はみなこれで生きてきたわけですから、まずこれを強化するという考えで始めました。IFN自体が、相手がどんな癌であろうと、どんなウイルスであろうと、攻撃してくれるわけですね。

ですが、IFNが必ずしも正義の味方であるわけではなく、全身投与しますと、癌細胞の方にもIFNが行きます。癌細胞は元々は自分の細胞ですから、自己を表現し始める、というか、自分を取り戻します。そうすると非自己ではなくなるので、IFNのNK細胞がそれを殺さなくなるわけです。そこで考えたのが、攻撃していく方の側だけに武器をもたせ、癌細胞が元に戻らないようにする。それには別々に処理しなければなりません。白血球だけにIFNを与えたい体内に戻すと、相手は丸腰のところに、活性化された自

分の白血球が癌を殺しに行きます。この方法だと一度に大量に処理できるのが大きいですね。

佐多：これまでに何人くらいの患者さんが治療を受け、その経過はどうでしょうか。

岸田：現在までに1225回、170名になります。

もちろんこの治療法の有効性については、まだ長期の検討が必要だと思います。が、副作用がないことから、他の治療法が適用できない患者さんや、手術などでほぼ癌細胞が除かれたものの癌細胞の残留が完全に否定できないような場合の再発防止、肝炎から肝癌への移行の抑制、転移の防止などに行う価値がある治療法と言えます。

実は私も3年ほど前に肺癌だと言われまして、手術されそうになったんですね。簡単な手術ですよ、手術後は酸素ボンベを下げた歩かなくちゃならないかもわかりませんが…。ちょっと待ってくれ、と言ってこのIFNANKをやりました。6~7回やったら胸の癌らしい影がスーッと消えちゃいましたね。今でも出てきません。その外科の先生は会うたびに僕の顔を見て首を傾げるから、まあ今度出てきたら手術よろしくお願ひしますよ、とこう言っております。

佐多：治療は当然自己負担になりますか。

岸田：保険適用はありません。機械は1,500万円程度のもので数年は使えるとして、あとはディスプレイのキットが必要です。これをパチパチとはめて使います。それに医者がか2人、看護婦がか2人ついて、2時間半ほどかかりますから、1回16万円かかります。回数はケース・バイ・ケースです。

佐多：ところで、先ほどお話をしましたDr.モンタニエですが、このセンターの中に博士のオフィスがあるそうですね。

岸田：彼は、ご存知のように、'83年にHIVウイルスを発見しまして、アメリカのDr. Gallo(ギャロ)とどちらが本当の発見者か、大統領まで巻き込んで大論争がありました。ことは明らかでして、Dr.ギャロはDr.モンタニエが送ったサン



向かって右から
藤田哲也(ルイ・パストゥール医学研究センター研究部長)、渡辺慶一(同センター首席研究員、前東海大学医学部病理学教授)、岸田綱太郎、リュック・モンタニエ各先生、佐多保彦。(1999年11月5日)

ブルを自分で発見したと発表しただけです。エイズの治療法がもう少し確立されれば、それと抱き合わせてDr.モンタニエがノーベル賞を取るだろうと言われています。彼は、現在はパストゥールを離れまして、UNESCO傘下のWorld Foundation of AIDS Research and Preventionという団体のプレジデントです。彼はウイルス学者で基礎医学の人ですが、やはり医者ですから、世界のエイズの患者さんを一人でも多く救いたいと必死です。ニューヨークやコートジボワールにエイズ研究・治療の拠点を作り、パリのサン・ジョゼフ病院では病室をいくつか間借りして治療を行っています。そういう拠点を日本にも作りたいたいということになって、彼自身がここを希望しているので、取りあえず部屋を確保したという段階です。ここでしたら電子顕微鏡もMRIもすべて研究に使えますから。UNESCOというのはそんなにお金が出ないらしく、ここに研究者を常駐させるにも、彼自身で財団なり基金なりを作って、資金集めをしていかなくてはなりません。

私などもずっとIFNに関わってきましたが、やはりそれが癌やウイルス疾患にどのくらい効くかというのを知りたいからというのがあります。それで京都で臨床志向型の国際インターフェロン学会('83)を開いたりしてきました。基礎と臨床の間立って、医者というのは俗っぽいと言えは俗っぽい、とにかく患者さんを救いたい。パストゥールの医療を実践して、一人でも多くの苦しんでいる患者さんを救いたいというのが私たちの願いです。

岸田綱太郎著書
『インターフェロンの生物学』(紀伊國屋書店)
『インターフェロン』(毎日新聞社)
『制がん最前線』(共著、SRL)
『インターフェロンの臨床応用』(共著、日本医学館)
『インターフェロン-その研究の歩みと臨床応用への可能性』(総監修、ライフ・サイエンス)
『インターフェロン物語』(監訳、カリ・カンテラ著、ミネルヴァ書房)他。

(財)ルイ・パストゥール医学研究センター
〒606-8225 京都市左京区田中門前町103-5
Tel.075-712-6009 Fax.075-712-5850

新生児の聴覚検査

難聴の早期発見は、言語の習得に不可欠

三科 潤



三科 潤 / みしな・じゅん

1971年東京大学医学部医学科卒業。同年4月～東京大学医学部小児科学教室、'72年5月～関東労災病院小児科、'74年6月～都立築地産院小児科、'94年10月～東京女子医科大学助教授、母子総合医療センター小児保健部門長、現在に至る。その他、日本新生児学会評議員、日本新生児未熟児学会評議員、日本小児保健学会評議員、日本周産期学会幹事、ハイリスク児フォローアップ研究会常任幹事を兼任。

1998年の厚生科学研究として、3年計画で子ども家庭総合研究事業「新生児期の効果的な聴覚スクリーニング方法と療育体制に関する研究」が発足し、三科先生はその班長として本研究を進めておられます。まずはじめに、厚生省が導入を決めるに至った経緯をお聞かせください。

生まれつき聴覚の障害をもつ児は1000人に1人から2人と言われていますが、新生児期および乳幼児期には他覚的兆候が乏しいことから、2歳前後になって言葉を話さないなどの異常を親が訴えて初めて聴覚障害がわかることが多いのです。

近年アメリカで、新生児期にも対応できる聴性脳幹反応(ABR ; Auditory Brainstem Response)を利用した聴力異常のスクリーニング方法が開発され、有効であると報告されました。これまでは難聴のリスクが高い場合に限って聴力検査を行ってきたものを、自動聴性脳幹反応(AABR ; Automatic ABR)装置が開発され広く一般的に行うことが可能になったのです。早期に障害を発見して訓練を行うことにより、言語能力を発達させた場合、遅く療育を開始した児に比べ言語能力が優れていることが報告されています。そこで、日本でも早期聴覚スクリーニングに関して研究が行われることになりました。

この研究では、1)新生児期に聴覚障害を発見するための有効なスクリーニングと確定診断の方法の確立、2)その早期療育方法の確立、3)早期療育の効果の検討という3つの大きな目的を掲げています。

本研究におけるスクリーニングの対象、規模、現状；

対象、規模ですが、1000出生に1～2人という先天難聴の頻度において、検査の特異度、感度を統計学的に優位なものにするためには、少なくとも1万例を対象に検査を行う必要があります。現在、早期療育の可能な東京、名古屋、大阪周辺の15病院で、保護者の同意を得られた新生児を対象に、入院期間中に自動聴性脳幹反応聴力検査装置を用いて聴覚スクリーニングを実施しています。3年間で1万人のデータを集める計画です。

現状としては、まず1年目の98年度に、実施施設、使用機器などの体制作りをした上でスクリーニングを開始し、2年目の99年度は、スクリーニングの数を増やし組織全体を広げていくこと、および早期療育体制に関する実態調査を行っています。早期療育のプロトコルも現在作成中です。

聴覚スクリーニングのプロトコル；

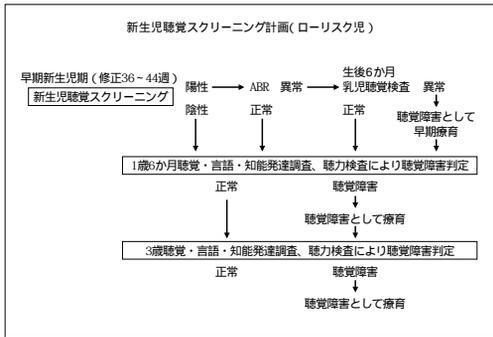
本研究のプロトコルでは、まず産科入院中にAABRを実施します。陽性のときは再度検査を行い、両側が要精密検査の場合は、ABRを実施します。この結果に異常が認められた場合は、行動聴覚検査なども併用して、聴覚障害の診断を行います。聴覚障害の診断基準は共通のものとし、聴覚障害と判断された症例は、本研究班で作成する早期療育のプロトコルに従って、療育を開始します。

また、スクリーニングの感度を求めるため、および早期療育の効果を判定するために、スクリーニング全例について、1歳6カ月時と3歳時に郵送による聴覚、言語、知能発達の見跡アンケート調査を実施しています。極低出生体重児、重症仮死児、重症黄疸児などは、聴覚障害発症のハイリスク群なので、AABRと同時にABRを実施して、一致率も検討します。

AABR ; 自動聴性脳幹反応装置はどんな機械ですか。また、アメリカではOAEという装置も数多く使われているとかがっています。

AABRは、

1. 睡眠中の新生児の耳にやわらかい音(クリック)を送る。
2. 脳が反応して、聴性脳幹反応(ABR)と呼ばれる特殊な脳波を発生する。



3. 反応波(ABR)を検出する。
 4. 自動的にそのABRを正常聴力児のABR波形と比較する。
 5. スクリーニングが終了すると、検査結果(正常/要検査)が印刷される。
- というしくみになっています。

OAE(otoacoustic emissions)は、日本語では「耳音響放射検査」と呼ばれているもので、簡単に言うと、音を出すもの(スピーカー)と集音するもの(マイク)を備えた装置です。内耳の蝸牛は、音が聞こえるとその音を反射してまた音を出すんですが、その音を拾ってきて分析するというしくみになっています。アメリカでは、AABRの他に、価格もランニングコストも安いハンディなOAEが数多く使用されていますが、false positiveの頻度が高いことを考慮して、今回の研究はAABRを使用することになりました。アメリカは分娩数の多い大病院ではOAEを行い、異常があればAABRという方法のところもあるようです。私共も、班の研究の一部でAABRとOAEの比較も実施しております。現在はスクリーニング用のOAEは日本には輸入されておりませんが、今後輸入された場合は検討していきたいと思っています。

AABRはかなり高価な装置ですね。

400万円前後の機器です。本研究では、アメリカ製の機械を使用していますが、他社のAABRも今年中に販売開始になると聞いています。安価で優れた機械が望まれます。またそれとは別に、日本では特に小規模クリニックの数が多いため、スクリーニング用OAEなども用いた何パターンかのスクリーニング方法を考える必要があるでしょう。

現在アメリカでは、51州中11州で、新生児聴覚ユニバーサルスクリーニングが法制化されました。また17州で法制化を準備中、11州で法制化はされていないが自主的なスクリーニングを実施しています。日本では厚生省がモデル事業としての予算を申請中です。

研究班とは別に、一部の病院ですでにこの検査を導入している

ところがあるそうですね。どの科が検査するのですか。

スクリーニングを実施する時期については色々な問題がありますが、早期発見と実施しやすさという点から、産科入院中が最も効率的でしょう。全出生児対象のスクリーニングの場合は、耳鼻科と連携しつつ、産科、あるいは小児科がスクリーニングを担当することになると思います。

現在検査を班員以外で行っている一般の施設は十数カ所だろうと思います。現在は保険適用ではないので自費診療となっています。

前述しましたように、厚生省では来年度モデル事業としての予算を申請中です。最終的には、1年間に生まれる約120万人すべてを対象にスクリーニングを実施することが目標ですが、それには数年以上かかると思います。

検査、診断とくると、気になるのは難聴とわかった後のケアです。研究班で早期療育プロトコルを作成中ということですが、現在の療育体制はどうなっていますか。

厚生省の所轄の難聴幼児通園施設が全国に26あります。また、聾学校の幼稚部も、3歳以下の児は教育相談として、ケアしています。他に、特に脳性マヒなどを合併している重複障害児は、小規模通園施設でも対応しています。

アメリカでは、オーディオロジストという聴覚の専門家があり、聴覚スクリーニングの中心になっています。日本でも98年末に言語聴覚士が法制化されましたが、現状では乳幼児のケアができる人はまだ不足していると思われます。

現在、日本の聴覚障害乳幼児の療育の現状を調査しています。スクリーニングで発見された聴覚障害児が、スムーズに診断・療育が受けられるような体制を作るための資料にします。同時に、補聴器の早期着用、家庭での教育、聴能訓練を含む早期療育プロトコルを作成して、3月に厚生省に報告書として提出することになります。

祈りつつ、微笑みつつ

カトリック病院の一つのあり方を考える

成田 稔

40年にわたり、国立療養所多磨全生園せんだいぜんじゅうえんにおいてハンセン病患者の治療にあたってこられた成田稔先生を、同園に隣接する高松宮記念ハンセン病資料館にお訪ねした。1963(昭和38)年からは並行してベトレヘムの園病院とも関わってこられた先生に、今回はハンセン病のお話ではなく、カトリック病院の一つのあり方について日頃考えておられることをうかがった。

国立療養所多磨全生園

「癩予防二開スル件」(「癩予防法」)、「らい予防法」に改正)に基づき、1909(明治42)年に1府11県の第1区連合府県立癩病院びんがせいのぜんせいびやんとしとして開設され、1941(昭和16)年に園に移管された。当時は1300人ほどの患者を強制収容していた。結核や精神病などの療養所とは異なり、村落的色彩の濃い特異な形態をもつ。現在では入所者も500人ほどに減り、平均年齢もすでに74歳に近い。「らい予防法」は、1996(平成8)年に廃止された。

ベトレヘムの園病院

昭和の初めに、ある結核療養所の患者たちから退院後の生活や家庭の事情など一身上の相談を受け、その苦難を知ったカトリック司祭ヨゼフ・フロジャック神父が、家を手に入れ彼らの世話をしたのが慈生会の起こりである。1952(昭和27)年「社会福祉法人慈生会」となり、乳児院、保育園、看護施設、病院、老人ホームなどを運営している。ベト

レヘムの園病院は、結核の軽症患者を自然に親しませながら社会復帰させるために、1933(昭和8)年清瀬市に設立された療養農園ベトレヘムの園に始まり、現在では103床の小規模一般病院。

多磨全生園、ベトレヘムの園病院と関わりをもたれるようになった経緯をお聞かせください。

1955(昭和30)年に多磨全生園の外科全勤めるようになり、その8年ほど後に当直医としてベトレヘムの園病院に向かうようになりました。はっきり言えば出稼ぎのようなものですが、そのうちに外来のほうも少し手伝うことになり、全生園の勤務を終えたあと病棟を回ったりもしていました。1982(昭和57)年に全生園の副園長、1985(昭和60)年には園長となり、ベトレヘムの園病院での兼業はできなくなりましたが、土曜日午後の外来と夜の病棟回りは続けました。1993(平成5)年に全生園を定年退職し、翌々年にベトレヘムの園病院の院長就任の要請を受け、ボランティアとして勤務は自由にさせてもらうのを条件に、昨年(1999年)5月まで院長を務めました。

ベトレヘムの園病院とはどんな病院ですか。

慈生会というカトリックの団体(社会福祉法人)が経営する病院ですが、内科が主流で規模も103床と小さく、CTどころか内視鏡すら備わっていません。またカトリック病院ではあっても、



退任後多磨全生園の患者さんたちから送られた、成田庭院にて。

職員や患者さんの中に信者はむしろ少ないといっていてよいでしょう。

それはともかく、私が院長になった頃の病床稼働率は80%前後と低く、これでよく病院がつぶれないと思うほどでした。まず何とかして病床稼働率を上げたいと考えましたが、集中治療の必要な急性期の患者さんは扱えません。そこで、すでに治療が困難になったターミナル・ケアの患者さん、濃厚な看護・介護が必要で施設入所の困難な患者さん、あるいは社会的適応でも行き場のない患者さんたちを対象に、入院を積極的に働きかけるよう努めました。また入院後は、その患者さんに退院後のより適切な場が見つかるまで、在院日数にはこだわらずお預かりするようにもしました。もちろん在院日数が長くなれば収入面での問題は起きてきますが、ゼロよりはましと割り切ることにしたので、病床稼働率もなんとかが95%くらいになりました。

ただその頃は、カトリック病院のあり方などを考えるゆとりはなく、退院したくてもいるいろと事情があってそれが難しい患者さんに、心配せず入院していただければ、創設者であるフロジャック神父が「入院料はどうでもいい」と決めて、何よりも患者さんに対する助けを優先した思いに、ほんの少し近づけたような気になっていました。

そのあたりとハンセン病とは何か関係がありますが。

ハンセン病の歴史の惨めさは、「らい予防法」廃止の前後からマスコミによって広く知れわたるようになりました。私は、そうしたことを度々聞かされていて、全生園に勤務した当初からよく知っていたつもりでしたが、今からすると、ばらばらでまとまりがないというか、あるいは突っ込みが足りないというか、知らなかったのと同じようなものでした。

それが全生園を退職した翌々年(1995年)、「らい予防法」についての日本らい学会の見解をまとめるようになってようやく、社会防衛の名のもとに絶対隔離が強行された意味、ハンセン病という重荷を背負ってあえぐ人々を犠牲にして社会が守られた理不尽などが実感になりました。同時に、無力な老人を疎外するという捨て捨て山



ベトレヘムの園病院



高松宮記念ハンセン病資料館

成田 稔 / なりた・みのる

1950(昭和25)年東京大学医学部付属医専卒。東京大学医学部病理学教室、東京歯科大学整形外科、同大学口腔外科を経て、1955(昭和30)年国立療養所多磨全生園外科(主に形成外科、リハビリテーション科)、1982(昭和57)年同園副園長、1985(昭和60)年同園園長、1992(平成4)年国立多磨研究所(ハンセン病研究所)所長兼任、1993(平成5)年同園、同所退官後、名譽園長。

的な考え方も、かつてのハンセン病対策と同じように思えてきました。追い立てられるような心配を老人にさせないことを、フロジャック神父の創立した療養農園ベトレヘムの園の歴史にほんの少し重ねてみた と言えばよいでしょうか。

とにかく病床稼働率が好転し、ハードの部分 が整い、あとはソフトの問題ということになりますね。

ベトレヘムの園病院に入院している患者さんの多くは、脳梗塞の後遺症や痴呆の老人たちです。すから、何はさておき、看護者や介護者、それとセラピストやケースワーカーの質の向上が当面の目標になるでしょう。その上に立てて、老人の生活の質(QOL)といったこと 対応の仕方によっては全体的、付随的にその向上につながるかもしれませんが や、介護保険の適応を前にした経営形態の模索などよりもまず、老人が安心できる場づくりのほうを優先して考えました。

そのほうが難しいではありませんか。

確かに「場づくり」と言っても具体性はありませんが、そのためにフロジャック神父は「祈りつつ、微笑みつつ」という素晴らしい言葉を残してくださいました。

はじめに断ったように、ベトレヘムの園病院の職員がすべて信者というわけではありませんが、相手が信者であってもなくても、この「祈り」の意味を伝えられるほどのものを私はもっています。私に言えるのは、私たちが普段よく耳にする「祈るような思い」というその「思い」についてです。職員は看取りの中で、そのような患者さんの「思い」に当然共感しなくてはならないでしょうし、共感できれば今自分が「しようとしていること」、「していること」、そして「したこと」が患者さんの思いに叶っているかどうか、自分自身に対して問いかけることが大切になるでしょう。

このような問いかけは、逆に自分が「そうされたらどうか」という問いかけにもなりますが、これで自分のしていることはよいことだとい

「決め込み」が僅かでも少なくなるはずですが。

少々冗談じみしていますが、実際、医者や看護婦のように相応な医学的知識をもつ者は、決して積極的に薬を飲んだりしません。

少々飛躍的ですが、自分に対する是非の問いかけを「祈り」としてとらえてみたわけです。「患者中心」という言葉はよく聞きますが、実際にそうすると、ときには自分を「無」にしなくてはなりません。それが「患者中心」ということの難しい所以であり、そこに「祈り」に通ずる何かがあるとふと思ったりもしています。

「微笑みつつ」というのは、難しいことでも何でもありません。微笑みはコミュニケーションの基本であり、重い痴呆の老人でさえも、微笑めば微笑みを返してくれることがよくあります。

そういうことが実行されているのがカトリックの病院ですね？

カトリックの団体が経営する病院といっても、過去においてはともかく、特殊な医療形態をもっているわけではありません。「祈りつつ、微笑みつつ」というフロジャック神父の言葉の意味を、私なりに解釈してみました。そうであればこの実践は人間として医療人として当然なことと言えます。しかし、それを世間がカトリック的と評価するなら、それが行われているところがカトリック病院だと言ってよいのかもしれません。

日本もこれから本格的な高齢化社会を迎えることになりました。

これは全生園での話ですが、100歳まで長生きをしたSさんというおばあさんがいました。ハンセン病の後遺症で両手は不自由でしたが、足のほうは至って丈夫で、病棟を回っては友達を見舞っていました。そんなある日、たまたま出会った一人の親しい看護婦に、「あんな風にボタボタ(点滴)注射をされてまで生きるのはご免だ。そうなら早いところ始末してね」と頼んだそうです。そのSさんが90歳を過ぎて、大腿骨頸部骨折がもとで寝たきりになってしま

いました。その看護婦は時々見舞っていたようですが、痴呆がはじまってだんだん言葉が少なくなるのに気づき、Sさんの今の気持ちを探ってみたいとは思ったものの「始末してほしい」と言われるのが怖くて何も言い出せませんでした。それでも、いつかSさんは言葉を失うのではないかと思いやっとな決心して、「Sさん、この頃具合はどうなの？」と尋ねたところ、「生きていれば、いい日もあるよ」と答えたそうです。あとで看護婦は、「あるとき私は、目から鱗が落ちた思いでした」と言っていました。

その頃私はある本に、「老人がいかなる病をもとうと、いかに不自由であろうと、生きることを、ただそれだけを支えるのに徹しよう。辛酸の果てを生きた老人たちである。今の生きざまがどうであろうと、それはそれでよいではないか。喜びも悲しみも、そして苦しみも怒りも、老人がそれを素直に表すことができ、見守る看護婦がそこに共感できればよい。老人の悲しみや怒りを抑えるのではなく、それを越えて生きる喜びを与えるのである。「本当の看護」と言われる一つの姿が、この「越える時」に見られるに違いない」という文章を挿んだ雑文を寄稿したことがあります。それだけに、その看護婦の言葉をしみじみとした思いで聞いたものです。

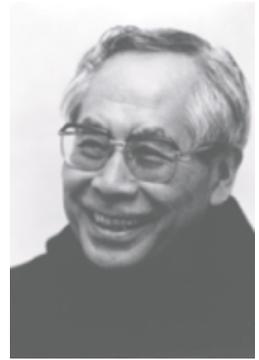
しかしこうして生き長らえた老人たちは、ときに言葉を失い、声を失い、指さす動きすら失いかねません。そのような老人たちから、何を見、何を聞き、何を知らねば、非常に難しいかもしれないが大切なことです。こうしたときにもフロジャック神父の「祈りつつ」という言葉は生かされるでしょう。

またベトレヘムの園病院の院長を退いた今どうこうは言えませんが、現在進行している病院の改築を機に、広い中庭の周りにどの病室から見える常緑樹を植え、ベッドの上の患者さんの目に緑が映ってほしいと願っています。緑に見える「ほっとした思い」は、私たちの患者さんに対する思いやりの足りなさを、きつと補ってくれるはずですが。

出会い(12)

修道生活きのうきょう

奥村 一郎



キリスト誕生以来、二千年の歴史の終末を前にして、新しい世紀が始まるようとしている。本稿が読者の皆様の目に触れるときは、すでに、新世紀の暁を迎えていることであろう。時そのものは、今も、いつも、光より速い瞬発速度で無限の永遠をめざして一直線上に飛び去っていくのであろうが、人間は、個人にしても、集団にしても、紆余曲折の道を辿りながら進む。「十年一昔」といわれる人生は、十年を節目にして、右へ左へと、ジグザグしながら過ぎていく。束の間の命とはいえ、そこには、歴史がある。ということは、伝統があり、また、創造があるということである。昨日があって今日があり、今日があって明日があるということである。今日まで育ててきたカトリックの修道会も、絶え間ない新陳代謝によってそれなりに成長してきた。もう短いとはいえ、私の人生の大半はその修道の日々であった。それも、カルメル山という聖地イスラエルの北部に位置する旧約時代から知られた山を発祥の地とする古い修道会であり、その名に因んでカルメル会といわれる。正確な意味で創立者をもたない、いわば、自然発生の修道会で、祈りを基本とする東方的キリスト教の霊性を特色とする。その会に私が入ろうとした五十年近く前の日本には、男子カルメル会がなかったため、まず、フランスの修道院に行くことになったことはすでに述べた。まず、志願期を南仏の町タラスコン、次に修練期は、ブドウ酒で知られたポルドー近郊ビレネー山脈の麓の寒村ブルッセイ、それから、中仏の大都市リヨンのカトリック大学でのスコラ哲学研修ま

で約五年、その後、フランスを出国、初めてイタリアに入り、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階まで五年、あわせて約十年の、ヨーロッパ留学を終えて日本に帰国することになった。

このようなフランスとイタリアでの生活は、私にとっては、すべてが二重に全く新しいものであった。文化の基本である言葉は勿論のこと、西欧的修道生活のなかで様々なカルチャーショックを体験していかねばならなかった。その幾つかを、本誌ですでに紹介してきたが、過ぎ去ってみれば懐かしくもあり、おかしくもある修道昔話の二、三をさらにつけそえてみよう。というのも、今の常識からすれば想像もつかないような修行がそこでは数多くあったからである。それらのことは、今後の修道の歴史にももう二度と振り返ることはない過去の遺産となってしまった。しかし、秋の枯れ葉が地に落ちて姿を消しながら、貴重な腐葉土となって木を育てていくように、未来に希望の花を開くための見えぬ糧となっていくことが待たれる。伝統なしの創造はありえないからである。

1. 聖堂と食堂：

修道院といえば、礼拝の場である聖堂をまず考えるのが普通。聖書にも、「何を食べ、何を飲もうか.. .」といて思い悩むな。何よりもまず、神を求めよ。そうすれば、これらのものは、皆与えられる。」とイエスは教えられている。(マタイ6.31-33)

ところが、修道院に入って間もなく、「修道院の中で最も聖なる処は聖堂と食堂です。そこでは、いつも沈黙を守らなくてははいけません」と言われた院長の言葉が今も印象に残っている。事実、当時のカルメル会の生活規則では、一生肉食が禁じられ、毎年9月14日、キリストの十字架が発見されたことを記念する日から、翌年度の復活祭まで、いわゆる、「断食」が約半年にわたって続く。カトリック典礼用語では、前者を「永久小斎」、後者を「大斎」とよぶ。肉を常食とする欧米人にとっては、厳しい会則であったに違いない。

奥村 一郎 / おくむら いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

それだけではない。食事中にも、修道者たちは代わる代わる、様々な苦行をする。あるものは、急いで食べ終わって、食堂の真真中に両腕をのばして十字架のキリストの姿をとる。もうひとりとは、跳きながら、修道者たちの足に接吻する。私は、はじめ、彼が何をしているのかわからなかったため、上から中腰にたつて彼をのぞこうとしたら、いきなり、私の足を爪でひつかかれた。「イタッ!」と、小声ながら叫んでしまったので皆からジロッと見つめられて赤面のいたり。また、ときには、院長自身が一人一人の前にきて、ていねいにお辞儀をし顔をだして、そのほつたを叩かれるという苦行があった。新米の志願者などは、手が震えて、なかなか、院長の顔を叩く勇気がでない。すると、院長が小声で、「叩け、早く!」とせき立てたりしていた。見ていただけでおかしくなる。新米のまた新米でありながら、私は、割に落ち着いて、ビシヤリと一発院長殿に平手打ちを献上した思い出がある。戦中軍隊で鍛えられたせいであつたか?にしても、このように少々乱暴な、しかし、パンチの効いた往年の修練方法は今も全く修道院から姿を消してしまつた。以前には、神の代理者とさえいわれ尊敬されていた院長時代であつただけに、一層意味があつたにはちがいない。

2. 罽毬(どくろ、されこうべ)：

もう一つ奇異な体験。入会の最初、はじめて食堂に案内されて、まず、ギョッとしたのは、正面の白壁に掛けられた大きな黒茶色の十字架とそれに掛けられた長い鞭、そして、その下にある院長席の食卓の上に置かれた、黒い罽毬を見たときだった。それも、模造品ではなく、本





物。しかも、昔この修道院にいて亡くなった修道者のものだそうで、案内の若い修道者はその頭を軽くなでながら見せてくれた。今もそのときの印象は鋭く胸に突き刺さったように残っている。修道生活は、確かに、「この世に死ぬ」という生き方を教える。弟子のひとりがイエスに「主よ、まず、父を葬りに行かせて下さい」と頼んだとき、イエスは言われた。「私に従いなさい。死者は死者に任せよ。」(マタイ8.22)仏教の出家修行も変わらない。とくに「自分に死ぬ」という心構えはどの宗教的修行にも根本的なものである。禅寺では、凍てつくような寒い冬、墓地で座禅に夜を徹することもある。それにしても、食堂の真ん中に、亡くなった先輩の頭蓋骨をそのまま置くというのは解せない。カトリックの教会や、修道院には、多くの人に慕われた聖人の遺骸や遺骨がきれいに飾ったガラス箱などにいれてあるのは珍しくない。とくに、死人の復活を信じているキリスト者の場合は、ある意味で、自然でもある。それにしても、食堂に骸骨を置くことまでは頂けない。何だか、悪趣味にさえ思えた。今また、振り返れば、当時のカトリック神学やその霊性が十字架を過度に強調する処からきたひとつの結果であったとも考えられる。同じカマルレ会であっても、今の修道院にはおそらくどこにもないことであろう。

他方、今は今で、人間は自分が生きることがかりに執着して、自然破壊、環境破壊、ついには集団的自己破壊にまで追い込まれてしまった。中庸の道はむずかしい。

付・女人禁制

カトリックの修道院、特に当時の観想修道会には、厳しい禁域制度があり、カマルレ会もそのひとつ。男子修道院では、もちろん、女人禁制。そこで、食堂の中に置かれた髑髏の性別を鑑定せよ、ということになった。整形病院にもっていくが、それとも、歴史的調査をするか、喧々囂々。すると、ひとりの修道士がまかりでいった。「わたしにお任せください。鉄槌一発で答えをだしてみせます。カチンと思いつり叩いてもピクともしなければ、女の頭であることに間違いありません。」

写真展のご案内

P.G.I. (虎ノ門)

1月11日(火) 2月10日(木)

P.G.I. 20 YEARS展

2月15日(火) 3月31日(金)

原直久 作品展「ヴェネチア」

Naohisa Hara " VENEZIA "

P.G.I. Shibaura(芝浦)

1月13日(木) 2月25日(金)

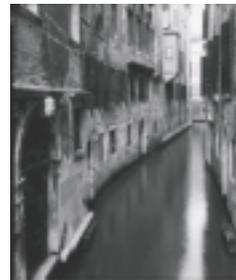
鈴木理策 作品展「サスキア」

Risaku Suzuki " SASKIA "

3月3日(金) 4月15日(土)

北山由起雄 作品展「流転」

Yukio Kitayama " REALIZE "



© Naohisa Hara " VENEZIA "

フォト・ギャラリー・インターナショナル(虎ノ門)
東京都港区虎ノ門 2-5-18 Tel. 03 3501 9123
月-金 11:00 - 19:00 土・日・祝 休館
地下鉄銀座線虎ノ門駅下車 2番出口より徒歩5分

P.G.I. 芝浦
東京都港区芝浦 4-12-32 Tel. 03 3455 7827
月-土 11:00 - 18:00 第2・4土、日、祝 休館
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分
ゆりかもめ 芝浦埠頭駅より徒歩15分



*表紙の写真 クリス・スティール=パーキンス作品 『London, 1990』



「この世に生まれ出た命。地球の新しい仲間たちです。しかし赤ちゃんを取り囲む地球の現実、食料不足、経済問題、戦争、人種差別、そして遺伝子操作、出生前診断。今も毎日3万5千人もの赤ちゃんが栄養不足で命を落としている、という狭い地球。なかよく食べて、楽しく、生命力を発揮して、このきびしい時代に耐えて天寿をまっとうしてほしいと願うばかりです。」

Chris Steele-Perkins

1947年 ビルマに生まれ、49年にイギリスに移住。ヨーク大学で化学を専攻、ニューカッスル大学で心理学の学位を取得。71年 ロンドンに移りフリーランスの写真家となる。82年 マグナムの正会員。88年 ワールド・プレス・フォトよりオスカー・バルナック賞、同年イギリスの最も優秀なフォトジャーナリストに贈られるトム・ホプキンソン賞、89年 ロバート・キャバリア賞受賞。95年より 98年までマグナムの会長を務めた。現在ロンドン在住。

クリス・スティール=パーキンスは世界中を駆け回りながら撮影を続けるフォトジャーナリストで、マグナムのメンバーです。スティール=パーキンスが訪れ撮影した場所は限りなくありますが、紛争と平和、飢饉と富など、全く異なる社会情勢のなかでその同種業の世界を行き来する作者は、極めて冷静でありながら、ヒューマニティ溢れる眼でそこに生きる人々を写し取っています。

わが心の遍歴

(2)日本文化への目覚め

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子)/かわむらゝえい
1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同大学哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルク大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor Theologie)の学位を取得。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化研究科教授として哲学、宗教学を教える。著書は『宗教学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教学』(新樹出版社、'94)、『神と宗教学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新樹出版社、'88)他多数。

1. ドイツへの留学

ドイツのハンブルク大学の神学部に留学したのは、1965年5月のことであった。その8カ月前には、筆者は、結婚しており、ドイツに向かって横浜港を出発した時には、京大のドクター・コースに入塾してまだ1カ月余りであった。ナホト力迄の船旅では、横浜港で別れた両家の両親、兄弟姉妹、祖母への様々な思いで、二人は船に酔ってしまった。その頃は、筆者は奨学金と家庭教師のアルバイトで暮らす苦学生であり、夫はドクター・コースを出たばかりの、大学の非常勤講師であったので、新婚旅行を省略した。それで両親たちが、新婚旅行の代わりにと一等船室旅行の費用を貸してくれた。しかし、高齢の両親や祖母たちにはもう二度と会えないかもしれない不安と初めてのドイツ生活への不安から、船室でのご馳走を二人は殆ど口にすることができなかった。しかし、その船の食事のテーブルで組み合わされていた他の二人の船客は、意外にも小説家の井上靖氏とそのご令息(東大のドイツ文学専攻の学生さん)であった。こちらの二人が船酔いで真っ青な顔でヒョロヒョロしている時に、井上靖氏は船室で小説を書き続けているとご令息から伺い、私たちが恥も、そんな力強い人間になりたいものとかから願わずにはいられなかった。

モスクワ経由で様々な失敗を繰り返しながら、目的地のハンブルクの地に着いた時は、先ずその町の自然の美しさに茫然自失の思いがした。美しく整えられたハンブルクの町の美しさは、まるでお伽の園に降り立ったようであった。5月の新緑に木々は輝き、小鳥の鳴き声はまるでモーツァルトの音楽さながらであった。町の中心部にあるアルスター湖は、太陽の光に輝き、その上を白鳥が泳ぐ光景は、まるで絵のようであった。

8年半お世話になったハンブルク大学での生活は、神学部の組織神学科においてであった。京大の大学院での指導教授であった武内義範先生の推薦状を持ってH.ティエリク教授をお訪ねし、その時から神学(キリスト教)に限定された宗教学科の勉学が始まった。初めてお目にかかるティエリク教授は、大変お背が高く、お声が低いバスで、ワーグナーのオペラに出てくる巨人さながらという印象を受けた。

何か分からないけれども潜在的に、将来大変な嵐に出会うであろうことを予感していた夫や筆者は、極めて慎重にハンブルクでの生活を始めた。やがて、予感していたその嵐が訪れてきた。日本学科に講師として勤務していた夫は、西洋人と日本人とのものの考え方の激しく相違することに我慢できず、研究だけに専心したいと願って勤務をやめ、哲学部の哲学科の留学生となった。それは、日本でも学生運動が最も激しくなっていた1969年の夏のことであった。

ドイツでも、その頃から教授の権力が批判され、大学の制度も色々改革された。ハンブルク大学の教授会は、学生側の要求によって、教授層3分の1、助教授・講師層3分の1、助手・学生層3分の1というメンバーの構成によって、実行された時期もあった。しかし、これは直ぐに廃止されざるを得なかったという。教授会そのものが、機能しがなくなったからと仄聞した。また、ハンブルク大学では博士論文と教授資格論文(ハビリタチオン)とは別々に提出せず、両方を一つにし、前者のレベルを高めて、これを同時に教授資格試験とすることになった。教授の権力を弱めるためであった。しかし、これも10年程で廃止となったと仄聞している。このようなドイツの大学の大改革の時期においての夫と筆者の生活は、夫の退職によって、ドイツの大学や財団や政府から給付される、二人のそれぞれの奨学金で過ごされることになった。それらは、二人の半年ごとの提出論文によってのみ継続可能なものであった。それは、綱渡りのようであった。今この時にも、筆者は、その当時受けたドイツ政府や大学の、またティエリク教授研究室やオイローバ・コレクから受けた莫大な奨学金の恩恵に対して、筆舌には到底尽くし得ない感謝の念で一杯である。住居も民間のアパートから、ヨーロッパ一番の設備といわれるハンブルク郊外にあるドクランデン・コレク(博士論文執筆中の学生用の寮)であるオイローバ・コレクに二人それぞれに試験を受けて入寮した。バス・トイレ・台所付きの独立の部屋を二つ与えられ、ここで生涯で最も恵まれた時期を過ごすことができた。ドイツ人20人、ヨーロッパの各国の留学生20人そしてそれ以外の世界の各国からの留学生20人の構成からなる60人が3年を限度に居住していた。寮長は、第一回ヘーゲル賞

受賞者のハンブルク大学のB.スネル教授であった。アジアの国からは、その当時はまだ私たち二人だけであった。そこで3年間の生活の後の約13カ月余りは、二つの学生夫婦寮にそれぞれ半年程住みながら、私たち二人のそれぞれの勉学が進められ、ドイツ生活の後半期における様々な感謝すべき更なる経験が与えられた。

2. ハンブルク大学での日々

ハンブルク大学には夫の親友が既に数年前から日本学科の第一講師としてご滞在であった。夫は母校の京大の諸先生方のお世話で、同学科の第二講師として赴任した。それは、主に同学科の図書室のお世話の担当であった。従って、筆者にもできる仕事は全部筆者が引き受けて、夫は同教室の主任教授の翻訳のお手伝いや読書に専心する日々が続いた。そんな日々にも、筆者も日本学科の図書室の図書類を毎日拝借しては、先ず日本の本の読書に励んだ。余りにも急激な文化や環境の変化に、大変なカルチャーショックを受け、自らの文化の根拠が全く分からなくなってしまったからであった。ドイツでの最初の数年間は暇さえあれば、ただひたすら日本の文化に関係のある日本人による日本の本を端から読み続けた。今から思えば、日本学科に日本語の沢山の図書があったことは、筆者に決定的な影響を及ぼすことになった。その頃最も多く読書したのが鈴木大拙の著書であった。

神学部での勉学は、初歩から一步一步着実にゆっくりとしていたので、浜山のエネルギーが日々余ってしまっていた。それで、日本学科の図書室の整理や日本書籍の読書のみならず、大好きな音楽の趣味にも浸って、しばしば教会音楽や宗教学の音楽会にも通って、ドイツの音楽を

徹底的に聞きもした。バッハのマタイ受難曲を毎年ハンブルクの大教会で聞いた。ヨハネ受難曲やマルコ受難曲も何度も聞いた。学生割引で聞けたので、無料に近い程に安かった。ピアノの練習にもずっと励んだ。また洋裁にも励んだ。更に、毎月一度は鋏と櫛を持って夫の理髪師にもなった。また、夫は映画が大好きであったので、ドイツ語の勉強と称して、学生寮の近くの、これまた無料にも等しい程に安い、昔々の映画をドイツ語でしばしば見たりもした。また、お友達のお母様方から、ドイツの美味しいケーキの作り方を教えて頂いて、毎月沢山の果物ケーキを作り、お友達を招待したりもした。お友達の結婚式にも幾度も招かれて、ドイツのお祭りや習慣に馴染んだりもした。毎日曜日、魚市場や野菜市場に出かけ、様々な国のお料理を、貧しいながらも工夫してはお友達を招いたりもしていた。庭から沢山のリンゴを採ってきて、沢山のリンゴジャムも作った。全く夢のような日々であった。貧しい奨学金生活ではあったが、大勢の学生さんと一緒に学生旅行にも3度参加した。パリ迄の往復バスでの1週間の、往復ハムレット号船でのイギリス迄の1週間の、そしてローマまでの往復汽車での1週間の学生旅行であった。また、毎週美味しいコーヒーを夫と共に大学のN先生の研究室でご馳走様になった。沢山の数えきれない程の色々な経験があった。しかし、ドイツに留学時代の筆者にとって何にも増して大きな出来事は、8年半程ドイツでご指導頂いたH.ティエリク教授との出会いであった。

ティエリク先生は、毎ゼメスター(半年一期の



1973年6月22日、H.ティエリク教授の御暮宅のお庭でのお祝いのパーティ。中央がH.ティエリク教授。向かって右が筆者(博士論文口頭試問終了の夜)。背景は真っ赤なバラの花壇。

学期)の初めに、オーバー・ゼミの学生と連足を共になされ、その後で全員を「青年の家」やご自宅での夕食会にご招待下さった。学生は皆、その日を毎学期楽しみにしていた。筆者も留学期間が長かったので、十数回もお招き頂いた。その都度沢山のドイツのお料理をご馳走様になった。先生のその頃お書きになった本を頂いたりもした。しかし、ティエリク先生は、一年に一度は大変な病気になるられた。ご多忙の中を、ミカエル教会での2000人を前にしての礼拝や信仰集会を続けていらしたからでもあった。救急車に迎えられて、教会から入院されたことも幾度かあった。大学の休講はあっても、教会での集会が休会となることは、少なくとも筆者がハンブルク大学に留学中にはなかった。寝台車で病院から教会に連れられ、集会でのお話の後すぐにまた寝台車で病院にお帰りのことも一度ならずあった。その間に筆者は学問のみならず、人間の生き方も学んだのであった。ある時、先生のご病気が数週間にもなり、ご退院なさってご自宅でご静養中と仄聞していたので、1時間程電車で揺られてご自宅に夫とお見舞いに向かったことがあった。御奥様に「書齋にいますからどうぞ」と仰って頂いたのので、お部屋にソツと近づくと、シンとした、四面の壁が天井まで恐ろしい程に書籍で一杯のお部屋の片隅に、ティエリク先生は椅子の上で瞑想中でいらした。入口でどうしたものかと躊躇っていると、先生はゆっくりとお部屋の中央のテーブルに近よって来られ「どうぞ」と仰って下さった。雪の積もった寒い日であったので、御奥様が運んで来て



1970年頃、オイローバ・コレクであるパーティーの夜。向かって右が寮長のB.スネル教授(古典学)、中央は、その当時ハンブルク大学哲学科のC.F.V.ヴァイツゼッカー教

下さったワインを皆で頂きながらその時先生からお伺いしたお話を、今でも決して忘れることができない。寒くなると必ずのように罹られたご病気は肺塞栓症であったので、まだ呼吸が苦しいのではないかとご心配申し上げたのではあったが、「いや、もう大丈夫」と仰って聞かせて下さったのは、先生の哲学の指導教授であられた、O.ヘリゲルの禪的なご生活振りであった。西洋一点張りのティエリク先生がご自身でどうして瞑想なさるようになったかのお話であった。先生のこのお話をきっかけに、夫は忘れかけていたプロテスタントの、先生と同じルター派の教会に毎日曜日筆者と共に求道のために通い始め、その年の暮れのクリスマスに洗礼を受けた。これは、オイローバ・コレクを満期で出ていく寸前の、病期1年余り前の出来事であった。しかし、その時には、前回よりはもっと大きな嵐がすぐそこ迄近づいて来ていたのであった。異文化との出会いの真っ只中で。

3. 夫の他界と流離の旅への船出

1977年10月4日、夫は名古屋大学医学部の病院棟で、癌で他界してしまつた。ハンブルクの教会での受洗後、段々と身体全体が浮腫み始め、ハンブルク大学の付属病院の医師の勧めにより毎日ジョギングや水泳をして健康に気を付けはじめた。病氣一つしたことのない健康そのものの夫ではあったが、医師の勧めで始めた運動で夫に無理のないように、筆者も夫と共に運動や散歩をした。そして、兎に角二人それぞれに博士論文を書き終えて、お別れに際して、ティエリク先生からは以前ご挨拶にお伺いしたご自宅のお庭から採ってきて下さった一本の真っ赤なバラを、御奥様からは先生は「今日は日曜日、教会の説教で来られません」と、筆者の大好きなスマイルの花束をハンブルク空港で頂いて、帰国したのであった。しかし、後から分かったことではあるが、退職した辺りから夫の身体の中で蝕み始めた癌は日増しに身体中に転移していたのであった。救急車で名古屋大学病院に入院した時には、既に手の施しようのない程の末期癌に進行してしまっていた。

夫の他界後、筆者は大海に浮かぶ木の葉さながらに心の流離の旅に、異文化間対話に、諸宗教間対話に、出かけた。先ず出かけたのは、禅のお寺であり、FAS協会であった。

(2) ハイスクール旅行記

フランス・スペイン

米川 恵子



米川 恵子 / よねかわ・けいこ
1979年京都生まれ。1993年よりスイス、Zürich (チューリヒ) 郊外のZumi kon (ツミコン)市に在住し、現在Zürich州立Stadelhofen (シュタデルホーフエン)高校ラテン語科に在学中。

今回は、最近学校から行った2つの旅行についてお便りしたいと思います。

私たちの学校では、1年に4回project weekが実施されます。Project weekというのは、学校から定められた2つの教科だけを集中的に、より深く学習する1週間のことで、この期間中には他の教科の授業は行われません。またその間教科で扱うテーマもひとつに絞られています。たとえば、昨年4月に行われたproject weekの時は、歴史と数学を集中的に学習しました。歴史は、いつもはヨーロッパの歴史を主に学習しているのですが、その1週間は中国の歴史、特に毛沢東がどのようにして権力を握り影響を及ぼしていったかに重点が置かれました。一方数学は統計と確率がテーマでした。Project weekの間の授業は日常と変わらず教室で受けるのがふつうなのですが、昨年6月に私たちのクラスは南フランスのニースの近くの小さな村で学習する機会に恵まれました。強化学習科目はフランス語と生物で、この2つを結びつけたすばらしい学習プログラムのおかげで、教科書や練習問題を超えた生きた学習を体験することができました。つまり、現地のフランス人と交流してフランス語を実際に使って学ぶかたわら、内陸地に住むスイス人のあまり知らない海の生き物、特にプランクトンについて大変身近に学習することができたのです。

ご存知のようにスイスには高いアルプスやたくさん湖はあっても、人々が海に接する機会があるとすればバカンスの時くらいで、私の友達でも海のことをあまり知らない人がほとんどなのです。

バスでチューリヒを出発し、約9時間後に到着



Villefranche sur-merでの生物の授業

したのは、ニースの東にある、Villefranche sur-merという村です。この村には、ノーベル物理学賞で有名なキュリー夫妻の名前のついた、Pierre & Marie Curie大学付属の海洋研究所があり、ここでは海洋生物に限らず、地震や気候などについてのさまざまな研究が行われています。6日間、私たちはこの研究所の設備と付属の宿泊所を使わせてもらいました。これらの施設は、本来なら他国から来る研究者や大学生のために設けられているものなので、私たちギムナジウムの学生が滞在できたのは大変幸運なことでした。

さて、Villefranche sur-merでの日課は次のようなものです。朝は8時に起床し研究所付属の食堂で朝食をとり、その後生物の授業が始まります。午前中3時間は研究所が用意してくれたプランクトンを顕微鏡で観察してスケッチしたり、海の生物の食物連鎖について学習します。昼食を終えると今度は水着に着替えてシュノーケルをつけ海底を観察し、海藻や魚のスケッチをしたり、海底の断面図を作成します。また、現地の人々の生活を知るために、数人のグループに分かれて研究所で働く人や近辺のホテルに勤める人にインタビューも行いました。私たちのグループがインタビューしたのは、研究所に勤める漁師さんです。漁師さんといっても、彼の場合は魚をとるのではなく、研究のためのプランクトンのみをとるプロなのです。漁船に備えられたレーダーでプランクトンの群れを見つけ、特殊な網で大量のプランクトンをとる方法を実演してくれました。ここでとれたプランクトンは研究所でさまざまな研究や分析に使われます。現地の人々との交流によって発見できた大きなことは、海の近くに住む人々の陽気な気質でした。



漁師さんとプランクトンをとる専用の網

海のない国スイスに住む私たちにとって、彼らの気質や、ライフスタイルは大変新鮮に思われました。

また、日帰りで訪ねたモナコの海洋博物館では、地中海のプランクトンの分布図を見せてもらい、地球上の人類にとって非常に身近で大切な海が、人類自身がもたらした公害によるプランクトンの過剰繁殖によって汚染され、食物連鎖のバランスが大きくくずされていることを知りました。普段の授業では、現在ヒトの体や遺伝子について学んでいるので、海洋生物というまったく異なった分野についていろいろ知るのとはとても興味深いことでした。

次は、つい先日クラスで行った卒業旅行について書きたいと思います。私たちの学年は、順調にいけば2000年の1月に卒業です。なぜ、順調にいけばかということ、その前にまず日本の大学入試にあたる厳しい卒業試験に合格しなければいけないからです。

さてどの国に旅行するかは生徒たちで決めることができます。条件は、スイスから電車もしくはバスで行ける範囲の国であることと、学校の指定した予算を超えないことです。そして、担任以外のもう一人の引率の先生も生徒たち自身で選べます。私たちのクラスは、担任であるフランス語の先生と、生徒に大変人気のある歴史の先生とともにスペインのバルセロナに6日間旅行することになりました。今回の旅行は、project weekとは異なり、目的は科目の学習というよりは、むしろバルセロナの町を見たり、スペインの文化を知ることです。事前にクラス22人が数人ずつのグループに分かれてそれぞれ半日分の観光案内を準備しました。何しろまだ行ったことのない町なので、皆ガイドブックと地図を頼りに、手探りで準備したわけです。しかし、建築様式などにも詳しい歴史の先生の充足説明のおかげで、私たちの頼りない案内も充実し、たくさん情報を得ることができました。見た目が落ち着いていて、どちらかといえば



サグラダファミリア教会(バルセロナ)

地味なチューリヒの町並みに比べ、バルセロナの町には、中世のゴシック式の寺院もあれば、ガウディが1882年に建て始めて今でも未完成の超個性的なサグラダファミリア教会や、ロマネスク様式、時にはファシズム時代の建物もあり、とても色彩豊かな雰囲気でした。また、スペイン人の生活のリズムを知るのも興味深いものでした。というのも、スペイン人は長めのシエスタ(昼の休息)をとるので店はたいてい午後1時から4時まで閉まってしまいます。夕食をとるのは夜遅く、8時にレストランに行くときまだ誰もいず、10時を回ってようやく混んでくるようでした。今回の旅行で残念だったことは、前述のフランスへの旅行に比べて現地の人々とのコンタクトがほとんどなかったことです。私たちの回ったところはどこも観光客がたくさん訪れる場所らしく、そこにはやはり多くの観光客とみやげ物屋しかなくて、現地の人々と身振り手振りで話したり交流する機会はありませんでした。バルセロナの町は大都会で人が多く、それに比べて交通も激しい上に縁が少ないので、12時間電車で揺られ再び静かで自然に包まれたスイスに帰ってきた時はほっとしたのが事実です。

フランスとスペインの旅行を通して実感したことは、言語や、現地の人々のライフスタイルを知りたければ、やはり現地で体験するのが一番よいということです。個人で行く旅行とはまた違って、学校からクラスメートと一緒に外国旅行はまた楽しいもので、その機会に2度も恵まれて、本当によかったと思います。次々といういろいろな面での発見があり、興味深い2つの旅行でした。



歴史の先生の説明：サグラダファミリア教会を設計する際にガウディはこうに天上から重しをつけたらみをつるし、教会全体を逆さにした状態で、塔の高さや細さに物理的な余裕があるか実験したという。

ネパール シェチェン診療所建設プロジェクト報告

篤志家の皆様へ

この度は「ネパール シェチェン診療所建設募金」の呼びかけにさっそくお応えいただき、ご厚志を賜りまして誠にありがとうございました。

皆様方からいただきました寄付金は、1999年12月15日現在 4,455,619円に達しております。本来ならば、お一人お一人に御礼状をお送りし感謝の念をお伝えすべきところ、銀行振込のため住所がわからない方がかなりおられます。たいへん失礼とは存じますが本誌での御礼に代えさせていただきます。もし、読者の皆様のご友人、知人の中にご寄付をくださった方がおられましたら、どうぞ私共の感謝の気持ちをお伝えください。

ご案内では1999年12月31日締め切りとさせていただきますましたが、目標金額を目指し、引き続き募金活動を行って参る所存です。今後ともご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

シェチェン診療所建設基金代表 柴田 廉
株式会社東機貿代表取締役社長 佐多保彦

Dear Contributors,

Shechen Mahabuddha Vihara is most grateful to all the generous donors who have kindly contributed to the building of the Shechen Clinic, near Kathmandu in Nepal .

Construction has started with great enthusiasm and we hope to complete the building by the end of May, 2000

The clinic should be operational very soon after that. We have no doubt that, through your help, this clinic will soon become a focal point for improving the health conditions of the needy people who live in our area .

We are determined to make this project come to fruition and express once again our deepest gratitude to all

Matthieu Ricard



診療所建設プロジェクトチーム



整地中の診療所建設用地(1999年10月)

ブルゴーニュの20世紀を振り返る

横山 弘和



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒師)叙任。現在在佐多会ヴィタリテ事業部在籍。

西暦2000年の年が明け、いよいよ新ミレニアムの始まりです。ここであらためて、ワインを飲みながら1900年代を振り返ってみましょう。繁栄の時代であったと同時に戦争の世紀とも言われたこの100年。戦争のない平和な世界になることを祈りつつ、ワインの記憶をたどってみたいことにします。

第二次世界大戦は、1939年9月イギリス、フランス両国の対ドイツ宣戦によって始まりました。1940年6月、フランスは国内に侵攻したドイツ軍に降伏し、4年以上にわたるナチスの占領時代を体験します。その間、各地のワイン産地では様々な被害や不幸な出来事が起きました。特にドイツと国境を接するアルザス地方では、退却するドイツ軍と追撃する連合軍との間で激しい戦いが繰り返され、ぶどう畑は徹底的に痛めつけられました。同時に戦場となったシャンパーニュ地方でも、大きな被害が出ました。ドイツ軍は上等のシャンパンを戦利品として大量徴発し、貨車で本国に運び込んだりもしています。

Operation Anvil^{カナル}(鉄床作戦*) : 連合軍によるブルゴーニュ解放

* 竊居屋が使う作業台

1944年8月、地中海沿岸サン・ラファイエルに上陸した連合軍部隊は、ドイツ軍占領下のフランスを南から解放し、その6月すでに北のノルマンディーに上陸しパリを解放しつつあったアイゼンハワー将軍率いる部隊とドイツ軍をはさみ打ちにするため北に向かいます。どういわけかOperation Anvil(鉄床作戦)と名づけられたこの作戦を実行する部隊の行く手には、シャトー・ヌフ・デュ・パーズ、タヴェル・レルミタージュ、シャトー・グリエ、コート・ロティ、美食家であればだれが出来るようなコート・デュ・ローヌの銘醸ワインの名前が連なります。更にその北にはなんと、世界のワイン文化の中で燦然と輝くブルゴーニュ・ワインの故郷、コート・ドール(黄金の丘)が広がるわけです。あと僅かで秋のぶどう収穫が始まろうとするこの時期、心配されたのは軍隊の通り道となるぶどう畑の運命です。もしドイツ軍と連合軍がその有名なモンラッシェやクロ・ド・ヴージョ、そしてロマネ・コンティなどの畑の中で一戦を交えたら大変なこ

とになります。しかし、大方の連合軍を指揮する偉い軍司令官たちはそんなことに関心もありません。何よりも早くナチスを攻撃して追い払い、先に進むのが先決です。もしそうになったら、ブルゴーニュの偉大なぶどう畑の運命はどんなことになるでしょう。

しかしここに、一人の優れた将軍が登場します。それは新しく編成された自由フランス陸軍のド・モンサベル将軍(General de Montsabert)でした。彼にとって、今回の作戦で一番重要なのはフランス国の将来で、加えて大のワイン愛好家である彼にとって、ワインセラーの充実は大きな関心事の一つでした。将軍は従軍記者たちに、このOperation Anvilを、人類にとって偉大な芸術作品であるブルゴーニュのぶどう畑を破壊から救うための作戦と考えている、と話しています。実際、連合軍の進撃でも、アメリカ陸軍は主に東部のアルプス山岳地帯を北に進み、自由フランス軍はワイン産地の多いローヌ河西岸の攻略を受け持ちました。そして戦略も順調に進み、フランス軍は問題なくマコネの近くまで兵を進めることができたのです。

ここで、ド・モンサベル将軍の情報將校たちは状況の把握に苦労します。ドイツ軍は間違いなく北に向かい撤退を続けている。しかし、どうもその速度がのろのろと遅く、コート・ドールの手前にある町、シャロン・シュール・ソヌ付近で足踏みをしているらしい。もしこれが事実なら、まずい状況です。何故なら、このままフランス軍が北進をすと、どうしても名だたるワイン街道のどこかで衝突することになる。仮に、ディジョンに到着する前に一戦を交えることになれば、大砲や戦車を使う機械化戦により、多くの特級、一級ぶどう畑が壊滅的な損害を受けることになる。そんなことが起きたら、祖国フランスの国民はどんなに怒ることだろう、絶対に許してはもらえないだろう、と頭を抱えます。とにかく1870年の普仏戦争*の再現は絶対に避けなければなりません。(* 1870年のフランス-ドイツ間の戦争で、ニュイ・サン・ジョルジュ周辺で大砲の玉が激しく飛び交い、ドイツ軍がラ・ターシュ、ロマネ・コンティ、そしてリッシュアルなどの畑を荒らして進軍した)

その頃野戦司令部には、様々な情報が集まってきました。ドイツ軍の有名なタイガー戦車が次々とムルソー村に配置されている、シャサーニュ・モンラッシェでは大爆破の準備が進められている、ポーヌの町の背後には強力な予備軍が集結中である。大佐参謀は軍事作戦地図とは別にフランスのぶどう栽培地図を広げ、最悪の場合を想像します。シャンボール・ムジニーの畑が空爆を受け、注意深く手入れされたヴォーヌ・ロマネのぶどうの樹を倒しながら戦車が進む。そして見えるのは、黒煙を高く上げながら燃え落ちるシャトー・クロ・ド・ヴージョ。そのときです。これまで何度もフランス軍を救ってきた、ドラマチックで思いがけない幸運が起きます。作戦室のドアを開けて入ってきた若い連絡將校が敬礼をし、「大佐殿、素晴らしいニュースです。我々は敵軍の守備の弱点を見つけました。ドイツ軍はすべて、品質の低いぶどう畑に陣を敷いています」と報告します。結局これがこの作戦の大きな転換期になります。報告を受けたド・モンサベル将軍は迷わず、ただちに攻撃を命じました。攻撃は見事に成功し、ドイツ軍はものの24時間以内にブルゴーニュから追い立てられるように敗走していったのです。

その後、将軍はジープに乗り、何台もの味方の戦車を追い越しながら国道74号線を北走します。見える景色は決して美しいものではありません。崩壊して落ちた橋や破壊された民家が続きます。しかし、西方に広がる丘陵コート・ドールに被害はなく、誇り高げにやさしい秋の日光を浴びた畑が並んでいます。不幸な戦争の中で、この国家的というより世界的財産といえる黄金の丘を守るという目的を達した満足に、将軍の目は喜びを隠せず輝いていました。この後しばらくの間、従軍記者たちはポーヌやニュイ・サン・ジョルジュの町でワイン・セラーに招かれ、信じられないほどの美味しいワインでご馳走攻めにあひます。そして、ドイツ軍の厳しい占領下、どうやってこのような大量の高級なワインが摘発や略奪を免れて存在するのか不思議に思います。これについては過去の失敗から学んだ教訓を生かした、ブルゴーニュのワイン商人の智慧がありました。1914年から1918年まで戦われた第一次世界大戦の苦い失敗の経験があった

